

著／桂たたら
絵／時磴茶菜々

小国
テスタ
タ 3





国家ヴァルクは豊かな自然に恵まれた土地だった。

遠方に聳える山岳から吹き降ろす風が、季節によつては農作物を倒しかねない勢いではあったが、それは種を運び、風車を回し、そして春を運ぶものだった。

海が近いが、海岸線のほとんどは断崖になっているため、あまり海水浴などは盛んではない。漁師が魚を捕まえるために沖合いまで出ていくのが関の山だった。国の周囲には森があつて、そこで捕まえられる動物や植物が、むしろこの国の主な食糧源となっている。

ヴァルクの東に広がるクライモ平原は、背の低い緑の絨毯のようだった。平原のそこかしこに点在する木々の集まりが、観光名所としてそれなりに知られている。

ヴァルクは、サスファイ大陸のほぼ中心に存在している。そして、大陸は横倒しにしたひょうたんのような形状をしていた。

例えば、

こんな戦争が起こらなかつたとしたら、ヴァルクという国は、貿易上における非常に重要な拠点として、人が集まり、賑やかに大きく発展していたはずだ、というのが、後世の歴史家たちの考えだった。

……だがしかし、ここから先は。

「戦争が起こる」という運命の、その先の物語が、語られることになる。

1

「キサラギの目的は依然として不明だ」

謁見室でヒナ王が声を張る。部屋には五十名ほど人が集まっている。その誰もが、沈痛な面持ちだった。

「現状を少しばかり整理しよう。」

つい先ほど、一時間ほど前に国の外れで作業中の技術者三名が襲撃を受けた。そのうちの二名は死亡、一名は軽症を負った。襲撃者の二名は捕獲したが、一名には逃走を許した。

それを皮切りに、領土内への突然の攻撃行為が行われた。遠距離からの魔術攻撃である。その発射地点はクライモ平原からだ。距離はおそらく十キロメートル程度。行ったのはキサラギの魔術師たち。その後も無差別攻撃が続けられているが、現在は迎撃によって被害は抑えられている。

キサラギ軍は、現在も進軍を続けている。このままあの二万の軍勢が、現在の進軍速度を保つなら、ヴァルクへの到達は明け方前になる」

ヒナ王は、そこまで話して、みな顔色を覗くように見ま

わした。

しかしこの情報自体は、すでに散発的にはあるが国全体へと伝わっている内容ではあるのだが。

「も、目的はなんなんだ……？」

「降伏をした方が良いに決まっている……！」

室内がにわかになぞわめいていく。口々に不安の声が上がる。

「どうなってるの？ これから、わたしたち、どうすれば良いの？」 ネットスが俺の隣で啞然とした表情で呟いた。「え、べ、別に、怖いこととか、痛いこととか、起こったりしないよね？ なんにもないよね？ ねえ、クロノ？」

「……………」俺はネットスから黙って目を逸らした。

大丈夫だ、の一言が喉につかえて言えない。俺は少女の一人を安心させてやることすらできないのだ。

「すでに降伏か否かなどという問題ではない」ヒナ王はその一言でみなを黙らせた。「敵国は、宣戦布告もなしに領土へ魔術攻撃を仕掛けてきているのだ。加えて、こちらからの通信は一切遮断してさえいる。目的もわからず、意思疎通も不可能な相手からの攻撃だ。この状況では投降に意味があるかどうか……」

静まりかえる謁見室に、ヒナ王の声がさらに続く。

「……キサラギの戦力が二万。対し、こちらの全国民が三千弱。正面から戦ったとして勝利など望むべくもない。かといって投降など聞き入れられぬ可能性が高い。となると残される選択肢は——」

ヒナ王は一拍置き、

「——逃走だ。それも、国全体での」

*

——数分前にさかのぼる。

謁見室で、ヒナ王に俺が状況報告を行った後、ヒナ王が立てた作戦がそれだった。

「逃走——ですか」ヒムロ翁が唸る。「しかし、国民全員で逃げるとなれば、それは非常に難しいかと。当たり前ですが、こちらには女子供も混ざり移動速度が遅くなります。対して、向こうは軍隊。追い付かれるのは時間の問題でしょう」

ヒナ王は会議室の中央のテーブルに、近隣の地図を広げた。「ヴァルクから一番近い国はルノワだ。そこまで逃げれば安全という保証もないが……。ヒムロ。国民全員がルノワまで

辿り付くのに必要な時間はどれくらいだ？」

「……」ヒムロ翁は怪訝な顔をしたまま、眉に皺を寄せた。「多く見積もって七時間ほどかと」

「今から国全体に勧告して、みながここを発つのに一時間。ルノワへの到着は朝か……」ヒナ王は一人で呟いている。

「で、キサラギ軍が明け方前にここへ到着……。数時間ほど稼げれば良いというわけだな……」

「ヒナ王、まさか」

「まさか、なんだ、クロノ？」ヒナ王はなぜかそこで笑った。「みんな、少し考えがある。聞いてはもらえないか？」

「大体察しはつきましたけれど。まあ、聞きましようかね」リコが諦めたように肩をすくめる。

会議室にいたのはほんの十名ほど。その全員が小さく頷いた。

「……血による革命を。神の血を引かぬ、厚顔なりし蛮族に復讐を。神々の末裔は申し出よ、我らは諸君を歓迎する」

ヒナ王はその一文を暗誦した。

「キサラギはそもそも王族が混血だ。それを彼の国は神の血統と呼ぶ文化がある。考えられるのは、混血が蛮族——人間族に対する復讐を行おうとした、というケース」

「時代錯誤、というか……。いまさらそんな理由で——と感
じますね」俺は率直な感想を言った。

「おそろくみながそう思っている。襲撃を受けている全ての
国がな。そう思っていないのは——、襲撃する側だけだろ
う」ヒナ王はわずかに目を伏せた。

「そのような激しい動きや国家理念があれば、すぐに察知で
きそうなのですが」ヒムロ翁が言った。

「巧妙に隠していたのかも知れぬ。まあ、そのことについて
はいま議論すべきことではない。だからそんなキサラギが、
人間族がほとんどで構成されたヴァルクへ侵攻してきた場
合、あまり考えたくないような事態が起こる可能性が高い」
「いきなり予告なしで武力攻撃してくるくらいですからね」
通信士を担う魔術師の一人が首肯する。「ついさきほど、出
力が一万を越える魔力波を検知しました。魔術構成の解析に
よって、領土上空で術解体が成功したため損害はゼロです」
「一万だって……!! この屋敷が三つ分は簡単に吹っ飛ぶ
ぞ、そんなの!」

もうその規模の魔術は戦略級だ。もはや状況は小競り合い
などという甘いものではなく、すでに——、
「——戦争」ホノカが小さく呟いた。

「決定的だな」ヒナ王は鼻から勢い良く息を吐いた。「全部
殺したって良い、混血が投降してきたら気まぐれに助けてや
ろう。……敵はそのくらいの姿勢で戦いに挑んできていると
仮定すべきだ。

——さて。これから話す内容は、少々酷なものになる——

*

拡声器で増幅されたヒナ王の声が、国土全域に響く。音源
の発生地点は全部で四箇所、効果範囲は領土を全て覆うよう
に配置されている。

「……以上が現状を簡便にまとめたものである。現状は一刻
を争う、直ちに最低限の荷物をまとめて、西方——ルノワ方
面へと移動を開始して欲しい」

空は曇天。時刻は深夜。本来であれば人の寝静まった静寂
のはずの暗闇に、ざわめきと焦りと、避難を促す怒号が混じ
る。

「怪我人には手を貸してやってくれ。老人には若い者が付き
添ってやってくれ。一人でも多くのものが助かるように尽力

してほしい。……これは、命令だ」

数瞬間の間。

「……ここから先は、私の依頼になる。聞くも聞かぬも自由だ。現在のキサラギ軍の進軍速度を考えると、今からここを発つみなルノワへ辿り付く前にキサラギ軍に追い付かれてしまう。進軍を止めるための戦力が必要だ」また数秒間の間が空いた。「敵軍は私が止める。だが、絶対だとは言いきれない。……もし、協力してくれる者がいるのならば、屋敷へと来てもらえると、非常に助かる。」

「以上で放送を終わる。……国民全員の無事を祈っている」
わずかなノイズを散らし、放送はそこで終了した。

*

さきほどのヒナ王の説明では簡便すぎるのではないか。
慌しく駆けずり回る職員達の間を抜けて、会議室へと向かいながら俺は思った。

会議室の扉を開けると、そこには見なれた顔がいくつか並んでいる。ヒムロ翁を始め、家老が顔を並べている。会議室は大きな部屋ではなく、せいぜい十五名程度入るのが限界

だ。いまはほぼその上限いっぱいに入っている。

失礼します、と俺は頭を下げつつ、なぜ自分がここに呼ばれたのかと考える。自分はここでの会議に参加せず、外で避難の手伝いをしていくべきだ。

まあ座れ、とヒムロ翁に薦められるままに俺は椅子に腰掛ける。

「クロノを呼んだのは私です」リコが少し大きな声で言った。会議室にいる全員に聞かせるためだ。彼女はこの部屋の平均年齢を大きく下げている。「いまやミロウーキサラギから貰い上げた人形ですら戦力として数えなければなりません。彼には一度だけミロウを操ったというアドバンテージがあります。いまから他人にその契約を譲渡するよりは、彼にそのまま使ってもらった方が効率が良いでしょう。のちほど、私からクロノへ操作方法の説明を行います」

「彼にはここに残ってもらったことについて、礼を言わなければならぬな」ヒナ王は言った。「もちろん、ここに残ってもらったみなにもだ」

「自分は——こんなときのために、ここにいたのですから」俺は率直な本心話す。

ここにいるみなが、それに小さく頷いた。それだけで、心

の震えが治まった。

「それで結局——、どの程度の人が集まったのですか？」

俺の問いに、ヒナ王は視線を外しながら答えた。

「ここにいる十三名のほかに、外で迎撃に当たってくれてい
るものを入れて四十名」

少しだけ沈黙が落ちる。

……二万を相手にするには、致命的に少ない。

「カレン・ヘートマン補佐との連絡は？」既に戦闘衣装に身
を包んだ体格の良い老人が口を開く。彼はヴァルクの魔術師
団の団長である。

さきほど謁見室で一緒に居た、俺より一回りほど年上の通
信士が、音信不通ですと答えた。

「居ない者をとやかく言っても仕方があるまい。思考を切り
かえろ。……目的は敵軍の足止めだ。最低二時間、できれば
四時間、敵軍の足止めを行う。我が方の勝利条件がそれだ。
正面からぶつかるには人が足りなさ過ぎるため、ここは兵法
の基本、敵の頭を叩く作戦を取る。幸い、クライモ平原はそ
んなゲリラ戦にお誂え向きの地形だ」

「乱立した木立を利用する、と」家老の一人が言った。

「そうだ。敵軍の針路上の木立へと身を潜ませ、司令官を叩

く

ヒナ王はあえて口にしないが、この作戦ともいえないほど
粗末な戦法には致命的な欠陥があった。

それは、こちらが不意をついて頭を叩いた後のことで——
考えても仕方がない。俺は恐ろしい想像を振り払う。

「しかし——、仕掛ける好機を逃さずに攻撃できるものか。
木立に身を潜ませるといふのなら、相手も眠った猫ではな
い、完全に気配を断つ必要がある。そこから相手の挙動を察
知するなど——、」

「ああ、そこでこいつの出番です」

扉を開けて会議室へと入ってきたのは両手いっぱいにおえ
るほどの荷物を持ったゴトーさんだ。

彼はどっこいしょと透明な半球状の荷物を、会議室の机の
真ん中に置いた。

「ここが指令塔でいいんでしょう？ おらリコ、さっさと配
線を手伝え」

「ゴ、トーさん……」リコは大きく目を見開いて呟いた。
「に——、逃げたんじゃなかったんですか!？」

「あにいつてやがんだ。俺が作ったコイツの初実戦だ。この
目でみねえわけにはいかねえだろうが」

リコは少しだけ嬉しそうに表情を輝かせ、すぐに不機嫌そうに唇を尖らせた。「ゴトーさんではなく、作ったのは私です。手柄を横取りしよーなどとはずるいですね」

「んだとこの」言いながらもゴトーさんは楽しそうに笑っている。

「……すみません。前言撤回します。うちの工房のみんなで作った、と訂正します。その方が正確でした」

突然しおらしくなったリコに、ゴトーさんは目を白黒させていた。

「これは一体？」ヒムロ翁が運び込まれた装置を見て言った。

「あ、それは……、百聞は一見に、です」言いつつ、リコは俺に手招きをした。

「なんだよ？」

「大人しくしてくださいねー」リコはてきばきと俺の首筋、手首とコードを繋いでいく。そんな作業中には相変わらずリボンがびよこびよこ揺れていた。「これは魔力波のエコーを拾って立体映像として再現する装置です。演算素子はダイナ氏の家にあるものをお借りしました。あの家は異世界と繋がっていますよ、これは比喻ではなく」

よし、とリコが俺の背中を叩く。

「いきますよっ！ システム・クレアボヤンスー——起動！」
リコが透明の半球状の装置を弄ると、途端、その中心が淡く輝いた。

最初はぼんやりした光だったが、徐々に光の輪郭ははっきりとしてきた。同時に鮮やかな色彩が彩られていく。

まず最初に見えたのはこの屋敷だった。半球の装置の中心に、この屋敷を真上から俯瞰した光景が、指先ほどの大きさで再現されている。次いで屋敷を中心にしてその周囲が輪郭どられていく。それは小さいながらもはっきりとした輪郭をもって再現されていた。小さな通りまでしっかり見える。

国内の再現が終わると、勢いを増しつつ、まるで水面に落とされた石が波紋を広げるように遥か彼方まで再現していく。

クライモ平原、断崖の海岸線、木立群、森林。

そして、クライモ平原の中ほどでこちらへと歩を進めるキラギ軍までもがはっきりと見えた。その軍勢は、ここから望遠したものと差異のないものだった。

「これで敵軍の動きは手に取るようになります。折角、こちらの陣地で戦うんだ、これくらいのリードはないと損でしょう？」リコがその薄い胸を得意げに張った。

すごいな、とその場にいるみんなが淡く光る半球状の装置に

見入る。

「兵士一人の動きまで分かるぞ……！ この装置なら……」

「クレアボヤンス・システム」リコが言った。「便宜的に名称があつたほうが便利でしょう」

「くれあほ……？」ヒナ王が首を傾げる。「ええい、面倒だ、クレアとでも呼んでおけ」

「……でも、使用に際して、一つ、欠点がありません」リコは申し訳なさそうに言った。「稼動に必要な魔力、この装置って結構大きいんです。平均程度の魔力容量では、一時間ほどしか持ちません。だから、使用するなら、交代で使うか、誰か魔力容量に優れた人に使ってもらうか……。本来であれば、これはカレンさんに使ってもらうことを考えていたのですけれど……」

それは実際に使っている俺が一番実感している。ミロウを操ったときほどではないにしろ、使用中に襲ってくる脱力感はかなり大きい。

「では、ここで全軍に指示を飛ばしてもらおうのが一人」ヒナ王の視線を受けて、通信士の彼が頷いた。「そして、この装置——クレア・システムの稼動のために残ってもらおうのが……、三名——いや二名か」

俺がここに残る——というわけにもいかないのか。ミロウを扱うのは既に俺で決定しているわけだしな。

しかし、クレア・システム——呼び方はヒナ王に倣おう——を使うとなると、ただでさえ少ない戦力を、さらに分割する必要がでてくる、ということだ。

「——私がやります」

突然の声に全員が振りかえる。

部屋の入りに立っていたのは、青ざめた顔をしたホノカだった。

国同士の戦争になることが分かってから、ずっと呆然として受け答えもまともにできなかった彼女を、国の外まで連れ出すようにと押し付けるように顔見知り頼んだのがついでさっきのことだ。

「魔力容量なら、この場にいる誰よりも私がいはいはです。カレン先輩ほどではありませんけれど、私一人で足りるかも知れません」

「ホノカ……。では、頼めるか？」

ヒナ王の言葉に、ホノカが小さく頷いた。

「ホノカ、無理をすることはない。前線じゃないからといって、これも危険であることには変わらない」

「ありがとう、クロノ。でも平気だよ。ここで逃げちゃったらさ、なんのために何度も戦闘演習やったのか分からないじゃない？ 大丈夫。覚悟は、もうできてるから」

彼女は氣丈に笑う。

争い事を嫌い、人との衝突をできるだけ避けてきたホノカだから、ここに戻ってくるのにどれだけの心の力が必要だったか知れない。

「それに、人は一人でも多い方が良いんでしょ？ それだけ、避難してるみんなが無事でいられる可能性が高くなるってことなんだから。無駄じゃないし、足止めだつて無理じゃない。……こつちには、戦いの女神様がついているんだからさ」

ホノカの視線につられて、俺も視線を移す。

次々と連鎖するように、その場の全員の視線が、我国の王——誇るべき、親愛なる統治者へと集まった。

ヒナ王は何かを喋ろうとして、口をつぐみ、それを数度繰り返してから、小さく嘆息した。

「……すまない。気の利いた言葉が思い浮かばない。ここは士気を上げるために鼓舞するような言葉を言うべきなのだろうが……。私のこの策は、大勢を救うために少数に犠牲

になつてもらうやり方だ。その少数になつてもらつた君たちに、最大の敬意と、称賛を与えたい。……願わくば、この中から一人でも多くの命が助からんことを——」

そのときだった。

一番最初に気付いたのはヒナ王だった。

俯きがちだった顔を上げて、遠くから聞こえる音に耳を澄ましていく。

どうかしましたか、と尋ねる軍師の一人の言葉を遮って、ヒナ王は会議室から駆け出して行つた。

その場に残つた面々は顔を見合せて首を捻る。その後には俺が続き、うしろから数名も追つてきた。

会議室から渡り廊下を抜けて、謁見室を通つて屋敷の外へ出ていくヒナ王を追う。

その頃になると俺にも分かつた。彼女が駆けている理由が。彼女は履物も変えずに外へと飛び出していく。

屋敷の外が騒がしかった。

本来であれば、もうほとんど国内に人は残っていないはずだった。もう避難勧告から一時間が経過している。

だというのに。

屋敷の正面。

国内で最も大きな通り。

そこに、大勢の人影があった。

手に手に武器を持った男達が、荒々しく雄たけびを上げている。

——それは、避難したと思われた、ヴァルクの国民達だった。

彼らが、再び戻ってきて、国のために戦う意思を示しているのだ。

「……………」

ヒナ王は彼らを呆然と見渡した。驚いた表情のヒナ王というのも新鮮だ。

彼らは猛る。

「すみません、遅くなりましたっ！ 家内と子供を国の外まで送っていたもので——」

「俺達も戦います、何をすればよいのか、指示を！」

俺もだ、という声が幾重にも重なっていく。

「さあ——ヒナ王。彼らにお言葉を。指示を」

ヒナ王はこちらへと振りかえる。まだ目の前の光景を信じられない、という表情をしていた。

「そなたは——クロノは、知っていたのか？」

「いいえ」

「ではなぜ、それほど驚いた様子がないのだ」

「まあ、その……なんとなく、ですよ」

こうなることに、ほとんど確信めいたものすらあったが、俺はそれを正直に言うことはしない。多分、言葉にすることに意味はない。

もう一度だけ、ヒナ王は全員を見まわして、

「この場にいるものたちは、みな、戦いの意思を持つと解釈して良いのか！」

ヒナ王の言葉に怒号が答える。

「心得た！ ならば約束しよう！ この場にいるそなたたちの勇気ある行動によって、必ずや避難した民たちの無事を確保すると！」

彼女の言葉に答えるように、怒号に怒号が重なっていく。

吼えることで、死の恐怖を誤魔化そうとしているのだ、と

俺は静かにそう思った。

トントン、と俺の肩が叩かれる。

振り向くと、そこには見なれた、柔らかな毛で覆われた二つの三角形——。

「ネッツー」

そこに居たのは、小柄なバスト族の少女。

続く俺の言葉を、彼女は小さな手のひらでさえぎった。

「待って。なにもいわないで。分かっているから。戻れっ
うんでしょ」

「当たり前だ」

「どうしても駄目？」

「駄目だ」

「でもそれっておかしくない？」彼女はにこりと笑う。「ホ
ノカもリコも良くって、なんで私には戻れっというのか
な？」

「お、——お前は軍属じゃない」

「バカにして。私も勉強した。この国、別に軍とかないじゃ
ない。危険なときはみんなが一緒に戦うんだ。そうなんで
しょう？」

「——そうだな。彼女の言う通りだ」

後ろからヒナ王が口を挟んできた。集まった群衆への細か
い指示は、すでに家老たちに任せているようだ。

「この戦いに参加すれば、ほほ死ぬぞ？ 分かっている
な？」

ヒナ王の厳しい言葉に、ネッツは黙って頷いた。

「戦う意思と理由があれば、女だろうが子供だろうが、みな
戦士だ。そなたの活躍に期待する」

言い残し、ヒナ王は屋敷の中へと戻って行く。それを見
送った後、

「……なぜ、」

言いかけ、言葉が喉に詰まっていることに気がついた。な
んでだ……？

「え？ わっ！ な、何で泣いているの！？」ネッツが驚いて
いった。

「なっ、——泣いてなんかねーよ！ 泣くわけねー！」
でも視界はかすんでいた。ほんとに泣いてるし。

「うそだよ、目え潤んでるじゃん！ 痛いのか？ 怖いのか？
えっと、どうしよう！」

「騒ぐなって！ ほんと、頼むから！」

不安に思い周囲を見る。そのとき、ちょうどこちらの様子
をちらちらと見ていたリコと目が合ってしまった。彼女は怪
訝な顔でこちらに近づいてきた。

「——まずい。リコなんか今の俺の様子を見られたら絶対
にバカにされる。」

「……そ、そうだ、人数が増えたから、装備の点検を手伝わないと。なにかあれば、謁見室まで呼びに来てくれ」

俺はそう言い残してそそくさと踵を返す。呼びとめるリコとネッツの声が聞こえない振りをしながら。

2

夜明けまであと三時間程度だろうか。

進軍する隊列の、真ん中よりやや後ろの位置で、馬に乗った男は空を仰いだ。まだ空は白んですらいらない。進軍速度は順調で、到着は夜明け前で間違いなさそうだ。

男の外見は人間族とほぼ変わりはない。ただ、額に生えた指ほどの長さの二本の角を除けば、重厚な鎧を着込んでいるが、その動きには重さを感じさせない。筋力が非常に強いのだ。

彼の周りではほとんどの兵が徒歩で移動している。隊の中では、彼は少々立場が上なのだった。

一定の周期で、鮮やかな魔力光が闇夜に煌く。それは放物線を描いてヴァルク国へと飛んでいき、そのどれもが空中で迎撃されていた。まったく遠距離魔術ってのは夜戦に向かないねえ、と彼は小さく呟いた。

その中にひととき大きな魔力反応を見つけ、彼はすぐさま指示を飛ばす。「おいおい、すこしは加減しろ。あんまりや

り過ぎると向こうさんが全滅しちゃうだろう」

すみませんでした、と注意された魔術師が身を縮こませる。

「――さあて、あっちがどうでてくるのか、見物ですnee、隊長？」

男は笑みを浮かべる。年齢は三十前だというのに、無邪気と形容するのが適切な笑顔だった。人懐こい、ともいえるかも知れない。

彼が話しかけたのは、同じように隣を馬に乗って進軍する男だ。

「少数精銳の迎撃部隊が展開してくる可能性がある。その場合の標的は俺達だ。油断していると寝首を掻かれるぞ、グリフ」

グリフと呼ばれた男は、へいと気の無い返事を返した。

隊長と呼ばれた隣の彼もまた、人間とは違う点がある。彼の特徴は、猫のような紅い瞳孔だ。明るい場所では縦に線のようにすぼまる。それを、グリフは非常に気に入っていた。射殺されそうなその視線が、獣の性質を匂わせるのだった。「しっかしnee……、またこれ、めちゃくちゃな指令が下りてきたもんでnee……」

グリフの愚痴に、しかし隊長は律儀に返答した。

「俺達は軍人だ。命令に疑問や感想を持つな」

そうは言っても、とグリフは思う。

今回の出撃命令。本隊に出された命令を要約すると、このような内容である。

目標国――ヴァルクへ進撃し、抵抗の有無に関わらず、人間族の男性を全滅させる。人間族以外の者、または人間族の女性は、戦う意思がなければ捕虜として捕えるが、抵抗するならば殺害せよ。

まったくむちゃくちゃいやがる、とグリフは思うが、それは彼の考え方がキサラギの中でも少々ずれているためである。一見したところ、この命令に反対しているものは少なかった。

「女は子供産ませるために捕まえて、男は殺して、ですか。

……蛮族とかいってるが、これじゃまるでこっちの方が……」

「グリフ。それ以上は口にするな」隊長が静かに咎める。

「わかってます。ま、任務遂行を第一に考えましょう」

しかし恐らく彼もまた、この命令に少々否定的な部分があるのだろう、とグリフは想像する。はっきり彼の口から聞いたわけではないが。

解せない点がいくつかある。

グリフはついさつき、隊長にこんな質問をしたのだ。

「もうこの距離から攻撃開始ですかい？ 早すぎやしませんか？」

「敵の射程距離外から予め攻撃を行い、敵の戦力を削るのは常套手段だ」

「声明を教える必要、ありますか？」

「布告をしない戦闘はない。これは当然の行為だ」

なぜ彼ははるか遠距離から、すでにヴァルクに対して攻撃を仕掛けるように魔術師どもに命令を下したのか。こんなもの、敵に接近を悟らせているようなものだ。効果だってそれほど大きくない。遠距離魔術は、魔力の大气への拡散率が高くなってしまい、それなりの準備をしないとこの距離では効果はあがらない。最初の数発が通るのがせいぜいだろう。あとは対策を打たれてしまう。費用と効果が釣り合わない。

それに、声明——血による革命を、から始まる文面——を伝えるタイミングも早過ぎる。あんなもの、制圧した後に伝えてやれば良いのだ。どうせ、人間族の男性や抵抗する者は皆殺しにするのだから。

つまり。

……やつらに襲撃を気づかせ、逃がすためだ。

グリフはしかし、彼のその思惑に気付かない振りをした。

ヴァルクの国民を取り逃がした、という指揮官としての汚点を背負ってまで彼がやろうとしたことだ。

これで、向こうさんが逃げてなかつたりして、ましてや全国民で戦闘を挑んで来たりしたら隊長の苦勞も水の泡だな、と思う反面、その場合ならば隊長が負う失点はなくなるな、ともグリフは思う。

結局、どう転んでも自分にやあまり影響がない、と結論が出た。所詮自分は叩き上げだ。責任を取らされることにはなるだろうが、それほど重大な過失ではない。聞いた話では、向こうの王は民衆の心を掴むという点においては秀でた人物らしい（他の素質は知らない）から、まあ上手くまとめてくるだろう。

「どう出てくるか、見物だねえ……」

だから、彼はもう一度だけそう言うって、はるか前方の小さな国を眺めた。

ひょこ、とグリフの視界の端に、一人の男が映る。彼はグリフと隊長の馬の間に入って、隊長を見上げ、次いでグリフ

を見上げた。

彼は見なれた愛想笑いを浮かべた。すると大きな犬歯が口元から覗いた。グリフは彼のその愛想笑いが卑屈に見えて好きではなかった。

「すみません、もうイチド、確認しておきたいのですけれど……」ひよこひよこ歩きながら彼は言った。犬歯のせいなのか知らないが、彼の発音は少々おかしいのだ。

「なんだ」隊長が視線を向けずに答える。

「約束、守っていただけますでしょうかネ……？」

「ああ、分かっている、分かっているって！」グリフは大声で言う。いい加減、彼のしつこさには辟易していた。学者としての全部こんなしつこいのか？「例の人物を捕まえたらお前に優先して引き渡す、ってんだらう？ 何度も聞いたぜ、ったくよお！」

「その人物の名前と顔、覚えてらっしゃいますスカねえ……？」

彼の話法には苛々させられる。早く終わらせるのが吉だ。隊長はすでにグリフに会話を任せているのか、口を開く気配がない。

しかしグリフは、ぐ、と言葉に詰まる。どうせ約束などハ

ナから守る気がなかったから覚えていないのだ。

「あれれ、覚えてらっしゃらない？ それでは約束を守っていただけルか、心配になってしまいますヨ？」

「リコ・ムーシン」隊長が静かに答える。「了解している。彼女は再優先で拿捕するよう努力しよう。その場合、すぐにお前に預ける。——それで良いか、ノウスト？」

にっこりと犬歯の男——ノウストは満足げに笑った。

「駄目ですよ、間違っても下品な男どもの慰み物なんかしちゃア。彼女には子供を産ませるよりも大事な仕事があるんです。大体、妊娠なんてさせて御覧なサイ、仕事効率は落ちるバツかりなんですから。彼女が私の下で働くようになれば、素晴らしい成果を残せるに違いありませんからネ」

「あー、なんだっけ、そいつも技術者なんだよな？」

「そうです。私ほどではありませんがね。こちらが顔写真になりますから、目を通しておいてくださいね。部下の方々にも、十分注意願いますヨ？」

「そいつ、こないだ送り込んだ人形にやられっちまってるってことはねえのかよ？」

「ありえませんが」ノウストはぎっばりと断定した。「彼女の専門はハード——それも材料方面とはいえ、ソフト方面は

さっぱりというわけではありません。あの程度のコードならば、そう、ちょうどここ数日くらいに解析が終わっているはずです」

話題が変わると急に饒舌になりやがる、とグリフは妙なもので見るような目でノウストを眺める。

「ソウソウ、ヴァルクの使いの方へ人形をお渡しした件……。その節は私のわがままですみませんでしタ。どうしてモ、私の下へ着いてもらうまえに彼女にソフトの予習をしておいてもらいたくテ」ノウストはそこで声をひそめた。

「……まあ、襲撃を事前に告知する、という隊長殿の目的と一致していたので、一石二鳥だったのデすしネ」

隊長は黙っている。

「隊長殿もお人がヨロシイ。わざわざ逃げるチャンスを与えるなどトハね。……では、私の役目は直接戦うコトではないので、後ろで控えていることにします。……ゴ武運を」

ひよこひよここと、妙な足取りでノウストは後ろへと下がった。

グリフはぼんやりとしながら、周囲で打ち上げられる色とりどりの魔力光を、見るでもなく眺めていた。戦闘前の心境

じゃねえな、と自分を戒めようとしても、どうしても意識が戦闘へと向かない。もともと勝利の決まった戦いなのだから無理もなかった。

「グリフ」

「は、はい！？　なんでしょ？」

隊長からの突然の呼びかけにびくりとしながら答える。ぼんやりした態度が悪かったのかも知れない。

「今後……、どうなっていくと思う」

「はい？　……ちよつと質問の意味が……」とりあえず態度を注意されるのではなさそうなので安堵。

「主に俺達のような混血で構成された大陸東部と、人間族で構成された大陸西部。おそらく、今では大陸西部全土で戦闘が行われているはずだ。突然現れた混血が、人間族へと戦闘を仕掛ける形で」

「――ええ」

「この戦争の行方と――、今後の世界の在り方が、どうなっていくのか」

珍しいこともあるものだ、とグリフは内心で非常に驚いていた。彼が政治などの業務以外で他人の考えを聞く、というのは、少なくともグリフは見たことがない。

3

「そうですね……」グリフは少し考える。「潜伏からの奇襲、という方法で先手は取りましたが、いずれはジリ貧でしょう。なにせ絶対数が違います。まあ、希望といえば、こちらの方が士気は圧倒的に高いということですね。人間族からの不当な扱いに不満を感じているヤツは多い」

隊長は聞いているのかいなのか、厳しい視線で前を見つめている。

「そして、しばらくはこの禍根が残ります。戦争による禍根がね。それが両者の歩み寄りを邪魔するに違いない。完全なすみわけ、又は共存がなされるまでに……、まあ、十年くらいはかかるんじゃないですかね」

隊長からの返答はない。相変わらず何を考えているのかわからないねえ、とグリフはため息を吐きたくなった。

「――お、もうすぐ夜が明けますぞ」

空が白み始めていた。夜明けが近いようだ。

木立群への潜伏は、より密に密生している場所――比較的、国に近い位置で行われることになった。

扇状に広く展開した小隊が、あと数時間もすればキサラギ軍を包囲する形になるように配置されることになる。

また、それとは別に、敵軍を正面からかく乱するための部隊が、ヴァルク国の正門付近に待機する。ここに割かれる人員はわずか二百名。この人数で前線を維持するなど最初から無茶な話であるため、これは完全な囮ということになる。

その囷に配置されたのは、俺、リコ、ネッツ、そしてヒナ王を始めとした面々だ。

「最後に一度だけキサラギ軍と交渉を行う。それが決裂した場合、私の合図で攻撃開始だ。私が先陣を切る。みなはそれに続け。そして、周囲に配置した部隊は、戦況次第で戦闘開始。その辺りは、ホノカたち司令室に居る者の判断に委ねる」

暗い鷲通りで整然と並ぶ人々に、ヒナ王が説明を行う。

「以上だ。……キサラギ軍の到着予想時刻まで、まだ少々時間がある。各自、自由な方法で時間を過ごすと良い」

*

がき、と草を踏み分ける音で、小さな人影がこちらに振りかえる。

「どうした。こんなところに居たら危ないぞ」

「――そっちこそ」

国から一番近い、森の中。

月明かりも差さない暗闇で、人ではない少女が笑った。

「……まあ、ネッツにとっては、ここは庭みたいなものか

……」

「うん。夜目も利くしね。危ないことなんてないよ」

なにせ彼女が育った場所なのだ。

彼女は俺に背を向けて、またさきほどと同じ場所へと視線

を向ける。

大木があった。枝の一本一本が太く、高さもある立派な樹

だ。

見覚えがある。ここは彼女の粗末な家があった場所で、俺

と彼女が初めて――、

「なんでここに来たの？」突然、ネッツが問う。

「お前がここにいるような気がしたから」

沈黙が落ちる。彼女は樹上を見上げたまま動かない。

鈴がなるような音がする。虫が鳴いている。

「ネッツ。今からでもお前は逃げる」

途端、ネッツが勢い良くこちらを睨み付けた。

「なんで。もう決めたんだ、私も戦うって」

輝く黄金色の視線が俺を射抜く。

威嚇するように大きく見開かれた瞳。

彼女は――人ではないのだ。

「ネッツならば……、投降しても聞き入れられる可能性がある

る。この国で、お前だけは種族が違うからだ」

「……………」

彼女は少しの間、呆然とした後、視線を落とした。

「さっき、クロノは泣いていた。私も、今、すごく泣きたい

よ。涙の意味が同じかどうかは分からないけれど」

俺には、ネッツが泣きたいという理由がわからない。

――どうすれば彼女を無事に生き延びさせることが出来る

のか。

それだけを俺は考えている。

「一つ分かったことがあるんだ。頑固なクロノを納得させる方法。……この数ヶ月の間にね」

「納得させる方法？」

「ろんりてきであれば良い。つまりはそういうこと」

俺から見て斜になる彼女の身体。

空を見上げていたその横顔――、

突然、彼女の目だけがこちらを向いた。

――瞬間、

彼女の姿が掻き消える。

頬に風を感じ、咄嗟に上半身を振る。

数瞬前まで、俺の顔があった場所を、いつのまにか俺の側面に回り込んでいたネットスの右腕が通過した。

「良い反応――！ 模擬戦の成果かな！」

空振りしたネットスが態勢を立て直すための時間を、俺も同様に態勢を立て直すために使う。彼女を視界に収め、反射的に半身に構えた。

彼女は地面を蹴って、真っ直ぐに俺の懐へと飛び込もうと

する。

速い――が、対応しきれない速度じゃない。

突進に合わせて突き出した俺の掌底を、彼女は避けるべく地面を踏み込んで減速した。

予測通りだった。こちらの掌底にネットスが反応することは折り込み済みだ。俺は止まりかけた彼女の身体を掴もうと手を伸ばし――、

――また、ネットスを視界から喪失した。

まばたきの間に地面が目の前にあった。

右腕が背中に回されて動かせない。彼女の膝が、俺の腰を押さえている。

地面に押さえつけられて、完全に身動きの出来ない状態だった。

「――いつかの、お祭りの日の大会。私と一緒になら、もっと簡単に優勝していたかも知れないね。そうは思わない？」

彼女は俺の身体を固定しながらいう。

「ああ、……その可能性は高かったかもな」

「そうだよね――」

くすくす笑いながら、彼女はいたずらに俺の肘をねじり上

げた。痛みと思わずうめき声があがりそうになるが、歯を食いしばってこらえる。

わずかに、ネットスの呼吸が荒くなる。熱っぽく、少しだけ上ずった声で言う。

「前にリコが言っていた。私の方が力あるから、クロノを押し倒すのも良い、つて。もつと早くこうしていれば良かったかな。どう思う？」

「どう、思うって……、遠慮、してくれろと助かる、ぞ……」

「——さっきのは、少しフェイント入れただけ。クロノの目の前でステップ踏んで、緩急つけたの。たったそれだけ。……でも、それだけのことに、クロノは反応できていない」「そいつは……悪かったな」捻られた肘と、膝を置かれた肩の痛みで脂汗が浮いてくる。

「私にはあなたの方が心配。戦うのなら、私の方が向いている。それがわからないわけじゃないでしょう？ ううん、クロノなんて、魔術だつてあんまり優秀じゃないんだから、国のみんなよりも、もつと戦えない」

「そのためにリコからミロウを——戦う術を譲りうけた。これで少しは役に立てるはずだ」

「——」

ネットスが言葉を飲み込む気配がして、俺の身体の拘束を解いた。俺は身を起こして、軽く肩を回したりして体の調子を確認した。

「ごめんなさい……。痛い場所はない？」

「ああ、気にするな。……だがな、一ついわせてくれ」

びくりと彼女が怯えたように身をすくませる。怒られると思っているのだろうか、観念するように瞳を伏せた。

「納得、していないぞ、俺は」

「……え？」

「論理的に納得させるんだろう」

「……だから、私の方が強いんだから、クロノに心配されることはない、つてことを、」

「そこが根本的に違うんだ」俺は彼女に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。「俺が、お前に戦うなといっているのは、お前が弱いからじゃない。役に立たないからじゃない。お前には傷ついてほしくないからだ。分かってくれるか？」

「……………」

「たしかに、お前が戦列に加われれば、敵軍の足に大きな時間を食わせることができるだろう。成功率もあがる」俺は迷っ

た末に、ため息と共に本音を吐くことを決めた。「こういういい方は問題があるのかも知れないけど……、例えば、お前が戦線を離れて、そのせいで逃げた人達が敵軍に追いつかれたとしても、俺は構わないと思っている」

ネッツは俺の言葉に驚いたようだった。目をまんまるにして、頭一つ分は高い俺の顔を見上げている。

「そんなこといって……。他の人に聞かれたら、大変なことになっちゃうよ」ネッツは仕方がないなどでもいうように苦笑を浮かべた。「でもそれじゃ駄目なんだ。翠屋のおじさんのケーキも、楠屋のお姉さんの氷菓も、それじゃもう食べられなくなるからね」

「ネッツ——」

「この国は、私にとって、とても大事なものになっていたんだ——知らないうちに」

彼女は、国のある方向へと視線を向けている。

——分かってきたことなのだ。

さつき、彼女が戻ってきたときから。

彼女に逃げる意思など、少しもありませんというように。

彼女はまるで踊るようにくるりと振りかえって、花のような笑顔で言った。

「もしここで死ななかつたらさ！　またどこかで一緒に暮らせると良いね！」

そして彼女は、先に戻るから、と去り際に言い残して駆けで行った。

5

この後の出来事は、記述者の推測と伝聞を元に再構成されたものになる。

*

(記された日付は開戦からおよそ50日が過ぎた頃)

結局、ヴァルク国王のキサラギ軍への交渉もむなしく、戦端は切って落とされることとなった。

まず先陣を切ったのはそのヴァルク王。後の世には、もはや伝説として語り継がれることになる四つ腕の巨人の逸話の、その幕開けである。

生き残った一部のヴァルク軍は完全に口をつぐんでいたが、キサラギ軍の兵士は、その巨人の戦いぶりに大きな恐怖を感じたと供述したらしい。

彼女——もはや彼女と記してもよいものか迷うが——の戦果は、士官クラスを数十名、一般兵を二千名近く。まさに一

騎当千と評する他ない。

彼女の末路は知られていない。少なくとも、キサラギ軍の公式記録には消息不明とされている。戦死したのではないか、という意見が一般的だった——開戦からしばらくの間までは。

……結局のところ、クライモ戦役はキサラギ軍の圧勝にて終結した。ヴァルク軍が投入した七百の軍勢は、捕虜と行方不明者の数十名を除き、全てが戦死したという記録が残っている。

その後のキサラギ軍の針路は、ルノワ方面へと向かっていったが、ルノワとヴァルクの中間地点でルノワ軍と大規模な戦闘が発生し、ルノワ軍はキサラギ軍を退けた。キサラギ軍は、後退を余儀なくされる結果になった。

そこから、実に長い小康状態が続くことになった——。

*

(記された日付は開戦から三年ほど後)

わずかな戦力のヴァルク軍が、大きな兵力のキサラギ軍に挑んだクライモ戦役。小さな国が行った、小さな戦闘だった

が、その内容は永く民衆の間に語り継がれることになった。民を逃がすために死地へと向かう勇氣の話として。

そして、混血の王が、人間族を救うために戦った、種族を超えた物語として。

*

(記された日付は開戦からおよそ四年後)

ここには、私が独自に調べたヴァルク国の勇敢な戦士たちの末路について記そう。……恐らく、今後、重要なデータとなるに違いないから。

カレン・ヘートマン。

人類史上最強の魔力出力と容量を持ったその魔術師は、しかし結局、クライモ戦役には参戦せずじまいだった。彼女に對してだけは、大規模な無力化計画が数ヶ月も前から準備されていたのだ。以後、ほぼ二年間に渡り、混血の支配化におかれた元帝都に監禁され続けることになった。

リコ・ムーシン。

人形開発の先駆者。彼女の理念は飽くまで「人形の作製」であったため、キサラギ所属のノウスト氏の「ヒトの作製」

という考えとは似ているようで大きく食い違っていた。だが、彼女は捕虜として捕まり、ノウスト氏の元で半ば強制的に働かされつつ、以後一年ほど軟禁されることになる。皮肉なことだが、ノウスト氏とムーシンの開発した人形達が戦争を一層苛烈にしたことを、ここに客観的事実として付する。

ホノカ・アグセプト。

医療系統に特化して優秀な魔術師。クライモ戦役では、戦争の革命とも呼ばれる広域探索装置——クレアボヤンス・システムをたった一人で五時間も操って見せた。国内にまで攻め込まれた際に、王室において抵抗するも戦死。彼女の側に、先述のノウスト氏の作製した、コード『鏡』と呼ばれた人形が修復不可能なほど完全に破壊されていた。彼女を守って最期まで戦ったのではないだろうか。

タダアツ・ヒムロ。

ヴァルク国の軍師。クライモ戦役でキサラギ軍を率いた隊長と交戦し、これをあと一步まで追い詰めるも敵に数で押し込められ戦死。ヴァルク軍が足止めを目的としていたのならば(恐らくそれに間違いはないが)、彼がもつとも貢献したと言えるかも知れない。

クロノ・ケイスケ・ホスター。

前述の『鏡』という人形を操った青年。目だった戦果は上げているが、個人的には士気を上げるのに一役買っていたのではないかと予想する。行方不明という扱いだ、死体の判別がつかない場合も行方不明とされるため、戦死したのではないかという見方を推す。

バスト族の少女。

ある事情から、人間族のみで構成されていたヴァルク国にバスト族が混じり込んでいた。驚くべきことに、彼女も一丸となってキサラギ軍と交戦したらしい。ホノカ・アグセプトと同様に、王室にて戦死。状況を鑑みるに、籠城のようなことをしていたのかも知れない。

*

(記された日付は前述の日記の35日後)

風の噂に聞いた、人間族による帝都の奪還作戦。それに拠れば、陣頭にいるのは例の混血の王だという話である。

開戦からほぼ四年が経過した今になって彼女が動き出したというのは、ようやく力を蓄え終えたということなのか。

ここからなら帝都まではおよそ二日ほど。大規模な作戦が

行われたなら、すぐにその話もこの耳に届こう。私は見聞きしたことをこの手記に残すだろう。

戦争の行方に興味はないが、しかし住み慣れた帝都がいつまでもよく知らぬ連中に支配されたままというのも面白くない。ここは一つ、かの王の勝利をひっそりと願うとする。

(この日の日記はここで終わっていた)

*

(手記の最後に記してあった文句)

この文書が、テストメントいずれ新しき聖書の末梢にでもなれば幸いである。

記述者——ダイナ・トローゼ。

4

その国はすでに侵攻を受けた後だった。

至るところに血痕が残り、修復されないままの家屋が痛々しい。人影は一切ない。まるで国ごと死んでいようだ。

まだ十を数えたほどの少女が、二十歳前とおぼしき女性を国のすぐ外で見付けたのは、少女が夕食の材料を採りに出かけたときのことだった。

彼女はすぐに姉に報せて自宅へと運び入れた。今となってはたった二人きりの国民であるため、倒れた女性を運ぶのも重労働だった。その女性が身体に負った傷はどれも重いものだった。彼女達は運を天に任せる思いで苦しうにうめく女性の世話を続けた。

その女性が目を覚ましたのは五日ほど経過した後だった。

女性は目覚めてすぐに彼女達に礼をいった。

少女たちが女性に名を聞いたところ、少しためらった後に、

「ヒストナだ」

と女性は答えた。

ヒストナは、次いで、今がいつなのか、ここはどこなのかを矢継ぎ早に質問した。姉妹が一つ答えるたびに、彼女は暗い顔になっていった。

姉妹の姉は、ヒストナとほぼ同い年くらいである。ヒストナに、傷が深いから落ち付くように、興奮してはならない、と忠告した。

「君達はこの国民か？ 他の住人はどうした？」

姉妹は、侵攻を受けたときの話を話した。家族から親戚まで全て殺されてしまったこと。一部はどこかへと連れ去られたこと。二人は両親が家の地下に匿ってくれたために難を逃れたこと。

「偶然だな。私と似ている。親しいものが、私を逃がしてくれた」

ヒストナは傷が癒えるまでの間、彼女達に世話になった。

一月ほどで傷が完治に近づき、体力も戻りかけてくる頃に、姉がヒストナにいった。

「もしかすると、あなたは貴族か王族の方なのではないですか？」

ヒストナは少し迷った後に首肯した。

姉は彼女の立ち振る舞いなどからそれを察知したのだった。

傷が完全に癒え、落ちた体力が戻ると、すぐにヒストナはその国を出る旨を姉妹に伝えた。

二人には感謝してもきれないほどの恩がある、この恩はいづれ返しにくるといった。気にすることないのに、と寂しそうに笑う姉の表情が、ヒストナには印象的だった。

別れたくない、と大騒ぎしてヒストナにひつついて離れない妹をなだめすかしていると、姉がヒストナに問うた。

「この国を出て、なにをするつもりなのですか？」

「知り合いを探さねばならない」

「知り合い……。その、あなたの国の方々ですか」

「今の私は国を——全てを失った王だ。……亡国の王のすることなど限られよう？」ヒストナは挑戦的に笑う。

「なにをする……。？」

「王国の再建を。」

失った人を、土地を、家を、

そして誇りと、私の一族の尊厳を。

——全てを、取り戻す」

*

開戦から、既に一ヶ月以上が経過していた。

戦乱の時代の幕開けである。

了